

冥刻園

胎動する狂乱の性根

著 国賀 雑
画 川 原 氏
原 氏



「あっ、ひあっ、お兄ちゃん……あっ、すごい……」
激しさを増していく抽挿に、真矢は余裕のない声を上げながらしがみついている。
大きくなっていく彼女の嬌声。ふとドアの外を窺ってみると、いつの間にか現れたのか、外部からきた男子生徒が集まっており、女生徒たちとセックスを始めていた。
「どうやら効果があったようだ。」
「真矢、彼女たちの注意が逸れてきたよ」
「あっ……んんっ、はぁ……んっ、あああっ」
浅田が声をかけても、真矢は腰の動きを止めようとはしなかった。



「大きく張り出した肉槍が美和子の腰奥に食い込むと……惱ましい喘ぎが、ベッドの上に響き渡った。『お願いします、抜いてください……』そんな美和子の懇願を、明はまったく聞き入れることは……なかった」
教科書として使用されているのは官能小説だ。その二場面を、授業中に朗々と音読させているのである。



浅田が入ってきたことにも気付かず、静恵は臍跳とした表情を浮かべたまま、何度も首を横に振って拒絶の言葉を吐き続けていた。四肢は小さな魔方阵によつて拘束されており、身動きすることすらできない状態のようだった。
「んあっ、いや……らめっ、もうスボスボしないでえ……」
弱々しい静恵の言葉を無視して、男はさらに抽挿の速度を上げていく。



はざま
狭間 エウ

神宮学園の教頭とシスター長を兼任している淑女。魔力では静恵に遠く及ばないと自覚しつつも、自身にできる限りの方法で浅田をサポートしようとしている。



にじょう しずえ
二条 静恵

神宮学園の学園長。学園を襲った「冥刻」に関する知識を持ち合わせている素振りを見せるも、協力者の浅田たちにすら決して真意を明かさずしない。



あさだ しん
浅田 真

神宮学園に新任したばかりだった教師。「冥刻」に蝕まれた学園、ひいては女学生たちを救うため、学園内外問わず奔走し続けている。



いじゅういん まや
伊集院 真矢

神宮学園の生徒で、浅田を兄のように慕いつつも、男として意識するようになった。「冥刻」の対抗手段として、浅田の精液による魔力供給を受け、守られている。

名門女子校である神宮学園を襲った「冥刻」という異常現象。周期的に発生する瘴気によって理性の籜が外れた女子生徒たちは、抑えようのない肉欲に支配されてしまい、その衝動に逆らって耐え続けると死に至る。そんな状況を救うため、浅田真は教師として学園に呼ばれた。冥刻に浸蝕された女生徒たちとセックスをし、精液を子宮へと送り込む。それが彼女たちを助ける唯一の方法だと教えられ、教師としての信念を曲げてまで応じてきた。だが、それが事実と反することだとしたら。すでに冥刻によって支配されてしまった街へ、女生徒たちを送り出すための訓練をさせられていたのだとしたら、とても許せることではない。実行していた自分も——それを命じた人物も。

——これまで、僕がやってきたことはなんだったんだろう。

